

『敵討誰也行燈』——解題と翻刻——

高木 元

〈解題〉

前号の『敵討枕石夜話』に引き続き、今回は『敵討誰也行燈』を紹介する。本書も曲亭馬琴の中本型読本である。

馬琴読本の研究史上、中本型読本に言及されたものはまだ決して多いとは言えない。周知の事ではあるが、近世文芸に於ける本の形態は内容と不可分な関係を保有している。馬琴の場合も中本型読本八作のうち七作までが所謂「敵討物」であり、黄表紙・合巻との比較も中本型読本を考えいく上で必要だと思われる。又、書肆の思惑を別にすれば、文化四年以後は中本型読本を執筆していない。黄表紙・合巻、中本型読本・半紙本読本等の形態が混在している文化初期の馬琴の文学活動を研究していくに当つての基礎作業として、現在稀観となつてしまつた本書の初板本を挿絵と共に翻刻する事は、あながち無意味ではないと思われる。

さて、題名となつている誰也行燈は、見返しに意匠されているが、その名の由来については『古今青楼嘶之画有多』（安永九）に見られ、これを利用している。又、『近世江都著聞集』巻九に見られる佐野次郎左衛門と万字屋八橋の話に取材している。この話は並木五瓶によつて『青楼詞合鏡』（寛政九年江戸桐座初演）に脚色され、「吉原千人斬」として知られている。更に、講談、実録にもなり、現在では『籠釣瓶花街醉醒』（三代河竹新七作、明治二十一年東京千歳座初演）として良く知られている。内田保広氏は、この籠釣瓶譚と『幡隨院長兵衛一代記』とが、権八小紫譚を介して結びつき、本書に利用されていると説かれている。（『近世文芸』二十九号所収「馬琴と権八小紫」）更にこの佐野次・八橋譚は文化九年の合巻『鳥籠山鸚鵡助剣』で再び用いられるのである。一方、後藤丹治氏は『太平記』の「新田義貞が剣を海中に投じて潮を退けるといふ故事」等を典拠として挙げられ（『太平記の研究』三八八頁）又、向井信夫氏は『窓の須佐美』第三巻中の一話を本書第四編で潤色使用している事を指摘している。（『続日本隨筆大成』第五巻付録）典拠ではないが、口絵第一図は振鷺亭の読本『千代裏媛七変化物語』（文化五・北馬画）の巻之五の挿絵（築太良北海に挺頭魚を殺す）に酷似している。その上、何故かこの図だけが自筆稿本（天理図書館蔵・上巻のみ）に見られる下絵と全く別の図柄となつてゐる。何らかの関連があると思われる。又、この鷄と闘う趣向も後に『朝夷巡島記』第六編（文政十）で繰り返されるのである。

この様に様々な話を撮合して成る本書は、里見家の御家騒動を多くの犠牲の上に敵討ちをもつて解決していくという構成を持つのである。

〈書誌〉

書型 中本二巻二冊 十八・五糸×十二・九糸

表紙 栗色無地（原題簽は底本、校合本共に現存せず）

見返し 黄色地。柳下流水と誰也行燈の意匠。「曲亭馬琴戯編／一陽齋豊國画／敵討

誰也行燈」「立とまる土手馬もその桺陰」「丙寅發兌全二冊」

序題 「敵討誰也行燈叙」

目録題 なし

内題 「敵討誰也行燈上（下）卷」

柱題 「魚尾 上（下）丁付」

尾題 「敵討誰也行燈上（下）卷 案畢」
（上巻はルビなし）

匡郭 単辺。十五・八糸×十一・五糸

丁付 上巻 叙二丁（序二） 目録二丁（一オ・三ウ） 口絵二丁（一ウ二オ・二ウ三オ）

本文二十七丁（四オ・三十ウ） 計三十一丁。 下巻 本文三十丁（一オ・三十ウ）

跋二丁（下の三十二） 刊記広告一丁（丁付なし） 計三十二丁

行数 叙七行 本文九行 跋八行

刊記 「文化丙寅年春正月發行／書肆 鶴屋金助梓」

その他 「曲亭著述六種中全本二冊乙丑秋七月上旬稿了」「剝刷 小泉新八郎」と刊記の

前にある。又、序一才に、水谷文庫、平林等の印あり。

本書には改題再摺本がある。主な書誌的異同を記しておく。「再栄花川譚」（序

題）半紙本四冊に分冊。「文化十三年丙子孟春」（序）と入木して直してある。内題「再栄花川譚卷之一（一四）」、「尾題「花川卷之一（一四）終」（巻之四是大尾）とそれぞれ入木。跋と刊記を欠き、口絵、挿絵の薄墨による彩色も一切省かれている。巻末には「文化新刻目録」が付され「皇都書林 東三条通寺町西入ル町 丸屋善兵衛」とある。丁付は、巻之一（序一オ・十五ウ）巻之二（十六オ・三十ウ）巻之三（一オ・十六ウ）巻之四（十七オ・三十ウ・半丁）と機械的に分冊した為、文章が途中で分断されている。

また、「改日本小説年表」には「敵討紀念長船 二 曲亭馬琴文化四年」とあり、本書の改題再摺本かとも思われるが未見。又、「再栄花川譚」を底本とし挿絵を書直した活字本が明治十七年六月に、金幸堂（稻垣良助）出版・金栄堂（牧野惣次郎）発売で刊行されている。校訂が杜撰なのは「読み物」としての出版ゆえ致しかたない。

〈凡例〉

原則的に原本通りに翻刻したが、以下の諸点に手を加えた。

- 一 片仮名は特に片仮名の意識で使われていると思われるもの以外は平仮名に直した。
- 一 右に拘わらず、助詞の「は」に「ハ」が用いられている場合は、これを残した。
- 一 本文には句読点の区別なく句点が用いられているが、読点と句点とに区別した。
- 一 衍字や欠字、表記上の誤りと思われる箇所は「」で示した。
- 一 挿絵は該当箇所に入れ、付された説明も翻字した。
- 一 内容が転換する箇所で改行した。

各丁の区切りに「印を付し、裏には丁付を示した。

底本には、故向井信夫氏御所蔵の初板本を使用させて頂いた。又、校合本として、服部仁氏より上巻を拝借した。記して深く感謝致します。

〈翻刻〉

かたきうちたそやあんどうのじよ
敵討誰也行燈叙「蕉窗夜雨」

くれ竹の世の物語に。その名のみ耳に遺りて。その更ハイとおぼろかかるぞおほかる。いでや行水の。ながれの里の事とも聞えし。蜘蛛に通ふ八橋に。二郎左衛門が浅きえにしも。浅茅が露のきりぎりす。つゞりあはせて隠家の。茂兵衛が勇て義ありし事。或は梅堀の小五郎兵衛が。慾と惡とにあかぬ恋路を。挾隈富次郎が廓の闇撃。善惡もわかぬ主は誰そ。誰也が最期のそのころより。燈し初たる行燈の。光めでたき玉くしげ。今ふた巻に述る事しかなり。

曲亭馬琴戯識「馬琴」「著作堂」_序

じょうのまきもくろく
上巻目録

- 第一編ハ隠家の茂兵衛が生育おひたち
父の紀念かたみハ研済ときすさました長船おさふねの業物わざもの
附タリ
主の使令つかひハ蹴けいたる垣かき越この剪毬それまき
- 第二編ハ佐野さの、次郎左衛門みちのきが紀行

文化丙寅孟春

下巻目録

附タリ ちからハ量られぬ蛇の網引
ゆくへハ定かならぬ若殿の遁世

○ 第三編ハ芝崎の寺入り主従

【口絵第一図】第四編挾野次郎左衛門殺鰐圖／あら海の底に入りけり三日の月／法橋吾山

1

2

【口絵第二図】第五編挾限闇撃圖／稻つまや闇のかた行五位のゑ／はせをぬ²

3

とり逃されぬ恋の癖者
うち返したる磁の片袖

○ 第四編ハ義女八橋か事蹟

妻の首級は祝言のとり肴
壇の引出は復讐の頭髪

○ 第五編ハ誰也行燈の縁故

忠義にあへなき敵どちの死出旅
身方にむすぶ婚縁のお國入

總目録畢³

敵討誰也行燈上巻

第一編ハ隠家の茂兵衛が生育

馬琴戯述

花しさかりに、月ハ限なきのみを見るものかハ。塵も流さずハ泉も涼しからじ。ゆきの降らずハ松の操もかひなからん。されバ貧くなりて、後のこゝろ清く、終に臨てめでたき言の葉を遺すなど、すべて五十年の非を贖ふに足ぞかし。むかしハ相州新井の城主、浦義同入道道寸の小屋從たりし身も、永正十五年七月十五日、道寸父子滅亡のゝちハ、心ならずも武藏國江戸のかたに落くだり、芝崎村の片ほとりに、幽なる棲して、三十餘年浪人

を立とほし、」艱難いふべうもあらざれど、二君につかへじと思ひ定めたれば、是をしも
憂とせず、親子四人尾羽うちからして、妻ハ三年前に世をさりしが、一人の子どももと
しごろになりつれば、せめてかれらが生きをバ、ともかくもして身を立させばやと思
ひしも、淡雪の泡ときえゆく、二月のはじめより、こゝちあしとて打臥しけるが、今ハは
やたのみすくなく見えしかバ、今茲十六才なりし児子長吉、十二才なりし女児八橋を枕ち
かく招きよせ、息の下にかき口説けるハ、御身兄才ハ、父が浪人して後に出生たれば、ふ
るき事ハよくも辨しらざるべし。われもそのむかしは、田津⁴ 造酒助徳敦と名告りて、
三浦陸奥入道義同ぬしの家臣たり。しかるに主君滅亡のときハ、われいまだ弱年なりしか
ど、ふたゝび仕官を願ずして、既にその志ハ致したり。されど御身等ハ、父が志を嗣
て、生涯浪人せんもよしなし、われなき後ハ、兄才よく心を合せ、身を立家を興すべし。
縦命薄く運つたなくして、民間に朽はつるとも、慾に惑て人を冤⁵ 義に違て生を貪ること
なれ。是ハ今般の紀念也とて、二尺三寸長船近忠の一腰を、長吉に与へつゝ、睡るがごと
く息絶けり。兄才の子共ハ、僅三年の中に二親喪ひしかば、心ぼそくも悲くて、何せん
すべも【挿絵】田津長吉獵師のわざをきらひ日ごとにちからくらべして劍術をまなばん事
をのぞみおもふ⁵」わきまへず。元來しかるべき親屬もなくて、淺草川の獵師茂兵衛とい
ふものゝ女房ハ、彼等が外叔母なれば、茂兵衛夫婦芝崎村に來りて、後の事などとりいと
なみ、長吉八橋をバわが家に引とりて養育せり。さる程に長吉ハ、叔母の許に養るゝとい
へども、獵師の業にこゝろをとめず、只顧武家に奉公せん事をねがふがゆゑに、旦暮の手
すきびにも、棒を使碟を打、相撲などとるに、力飽まで強くして、ひろき浅草の里人等
も、彼が相手にたつものなし。宣なるかな、後に隠家の茂兵衛と呼れて、當時第一の任俠
と聞えしハ、此長吉が⁶ 事にぞありける。是ハさておき、こゝに安房の里見義弘の家臣
に、挾隈富之進範光といふものハ、雙き劍術の達人にて、捕手ハ竹内の極意を受つたへ、
この外十文字長刀鍼琴柱など、家へ秘奥を究たり。しかれども稟性柔和にして、技に
誇る事なかりしに、同家中挾野太郎左衛門といふもの、これも富之進とおなじく、武藝をも
つて高禄を賜りながらその技は遙に劣りて、動もすれば他門の弱人に侮らるゝ事ありしか
ば、太郎左衛門ふかくこれを憤り、所詮富之進とうち果して、この恨をはらすべしなど、
いとはしたなく詈りけるを、太郎左衛門が弟なり」ける次郎左衛門ハ、今茲廿四歳の壯者

なれども、天性怜憐男子なれば、これきのどくに思ひ、御身ハ富之進どのゝ父御、官太夫殿の高弟にて、彼人の吹挙にあづかり、家中の師範を許され給ひし事なれば、挟隈の家に對して、甲乙を争んハ義理にたがへり。殊さら今の大富之進どのも、武藝は却て父御にも勝り給ふをもて、それがしも師弟の礼義を竭して敬ひまゐらするにこそ、忠義の二字に御こゝろつかバ、はやく偏執の思ひを轉して、昔のごとく親く交り給へかしと諫れば、太郎左衛門いよ／＼焦燥、骨肉同胞の汝ざへ、われを疎で、」富之進をひくものを、もし渠奴を打伏せずハ、他人の口を争か塞ん。再び諍ひとゞむるならバ、義絶すべしといひ懲し、遂に一通の願書をたてまつりて、挟隈富之進と為合仰つけられ下さるべし、と申出しかば、主君義弘承引あつて、富之進太郎左衛門の両師範、御前に於て為合いたすべきよしを命ぜらる富之進ハあへて勝負を好されども、主命黙止がたければ、すなはち太郎左衛門と立合て、立地に打臥せければ、義弘ます／＼挟隈を賞美し給ひて、當座に百五十貫文の増加をぞ賜りける。富之進ハ此よろこびに、「かねて信じ奉る、武州浅草の觀世音に、繪馬を奉納せばやとて、新に白木の檻をもつて、木太刀二振を作らせ、これを三尺あまりの額に飾つけばやとて、従者二人に扛擔せ、門人両三人を召喚して、浅草寺へ参る折しも、廣沢村の田の畠、きて、従者二人に扛擔せ、門人両三人を召喚して、浅草寺へ参る折しも、廣沢村の田の畠、き揚、この行潦を涉らんとす。浩處に年紀十七八の壯もの、馬手の畔路よりあゆみ來つ。これらねバ、木履ハ旅宿に残しおきたりと申すに、みな／＼せんかたなくて、袴のそば高つまみの光景を見るとやがて、おのがれが⁸穿る木履を脱て、富之進等が前へ跪き、この邊にハ蛭多し、これをめざるべうもやと申しつゝ、彼木履をさし出せば、富之進ハ志辱しと回答して、木履を借りて穿、露ばかりも足を濡らさずしてこゝを越るに、彼壯者、裳引からげて向ふへわたり、又その木履を持かへりて、かはるゝ門人等に貸てけり。富之進も門人等も、その志の信やかなるを見て、ふかく感じ、従者にもたせたる、錢一枚をとらせしかば、壯者押いたゞきて是をかへし、さて申すやう、御志をもどくに似たれど、人の為に履を取ること、かゝる報を受んとハあらず。願まゐらせたき事あるによりて、さハ「挿絵」さくまとみのしなあさきでらさんけい挟隈富之進浅井寺へ参詣のみちすがら長吉が木履を借りて行潦をわたりそのこゝろざしを感じじて武藝の指南せんと約す」」つかふまつりたりと申ス。富之進聞て、願ひとハ何事ぞ、身に應ぜし程の事ハ、聞とゞけて得さすべし。とく／＼申候へといへば、壯者いよ／＼身を

屈め、かく申せバ嗚呼なる者と思されんが、わが身元來武藝執心なりといへども、御覽のごとく此あたりハ、草ふかき田舎にて、しかるべき師匠もなく、日來こゝろ憂思ひたりしに、只今殿の持せ給へる繪馬を見るに、房州里見の家中挾限富之進範光敬白と記しあれば、問ずして既にその人なるをしれり。抑殿の武藝に勝れ給ひし事ハ、近國にかくれなきを、はしなくも行會まるらせしこそ、思ひも¹⁰かけぬ幸なれ。これを三卅の縁にして、お草履なりともかいつかみ、殿さまたちの稽古のをりく、見なれ見まねて太刀ぬくすべ、捕手のはしをも見るならバ、此うへもなき御高恩。とかく御家へ奉公の望にて候、と大地にひれふし願ふにぞ、富之進感心し、下邳の圯橋の例に效ふ、彼ハ日本の張良ならん。かゝるものに教ずハ、弓矢神の冥利に竭べし。汝父母ありや、年ハいくつ、名は何といふと問バ、名ハ長吉と呼れて十八才也。親どもハ往に身まかりて、浅草川の上なる、叔母の許に養られよといへバ、茂兵衛夫婦縁由を聞いておもふやう、長吉ハとても獵師となり果べきもの候と答ふ。そハよき路の序也。われとゝもに來よといひてまづ觀世音に参詣し、それより長吉に案内させて、獵師茂兵衛が家に至り、しかゞゝの物がたりして、この壯者をわれに得させよといへば、茂兵衛夫婦縁由を聞いておもふやう、長吉ハとても獵師となり果べきものにあらず。殊に力技をこのみて、人に癒つけなどする事たびぐくなれば、是よき仕合なりと了簡し、さつそく得心して進らすべきよしを回答すれば、富之進大によろこび、やがて長吉を俱して房州に立かへり、彼を草履取にして召使つゝ、をりく、武藝を指南するに、元より好むところなれば、僅二三年のうちに、めきくと上達し、高弟の徒といへども、却て長吉をハ侮りがたく¹¹ぞおぼえける。こゝに又佐野太郎左衛門ハ、過つる年、晴なる為合にうち負て、面目を失ひしより、ますく門人も疎み離れしかば、いとゞ無念やるかたなく、富之進とハ屋敷も隣て、垣只一重を隔つれとも、通路を断て胡越のごとく、若黨中間に至るまで、互に言葉をかはす事さへ禁ずれば、人々な爪弾して太郎左衛門を憎み、富之進をひくもののみぞおほかる。元來富之進ハ、風流の心がけもありて、をりく、鞠など蹴て、遊ぶを、富之進が弟なる富次郎といふもの、日來これを羨み、己もかゝる遊びをこそとおもへども、富之進これを許さず、御身ハ今茲十八才にて、武藝もいまだ未熟なるに、もし遊藝に心を奪るゝときハ、卒業の害となるべし。兄が鞠をうらやましく思ひ給はゞ、われもこのゝちハ蹴まじといふに黙止めしが、一日富之進ハ出仕して畠守なれバ、富次郎わざくれに、かの鞠をとり出し、長吉を相語つゝ、庭に立てて蹴たりけるに、主従その技に疎ければ、あな

たこなたと蹴る程に、富次郎が蹴る鞠剪て、隣屋敷へ撲地と落るに、長吉是ハとうち驚き、足をそらにして慌忙ども、そのかひなけれど、富次郎以外の外に周章し、隣家の抜野氏とハ、年來不和なるに、われよしなき戯して、鞠を彼處へ蹴おとしたれバ、縦乞求るとも、輒ハ返すまじ。^[12]さればとてこのまゝに^{〔12〕}捨おかバ、兄貴のかへり給ふて、鞠をいかにしつる、と問れんも難義なり。さて何とすべきとかき口説バ、長吉も共に愁て申スやう、尾を屈て伏す犬にハ、笞も撓とこそ申せ。太郎左衛門様いか程憤り給ふとも、それがしく重にも賠て、鞠をうけとり帰るべし。御心安くおぼし給へといひつゝ、一刀跨て太郎左衛門が屋敷へ走りゆき、言葉細に、礼義を厚くして、例の鞠をぞ求ける。是より先太郎左衛門ハ、庭にたち出て、泉水に咲そめたる杜若をながめ居りしに、思ひもよらず一ツの鞠、堺のかきを飛こして、百會のあたりへ撞と落れハ、驚き怒りてその鞠を踏潰し、しばし隣のかたを白眼つゝ、こなたよりやいひかけん、彼が賠をやまたんと、とさまかうさま思ふ折しも、下部権平、長吉か口上をとり次て、しかぐの事也と申スに、太郎左衛門聞もあへず、其奴はやく庭口より引ずり來たれと下知するにぞ、権平切戸を押開き、長吉が肩先擗で、椽頬ちかく引居たり。時に太郎左衛門大の眼を瞋し、汝ハ富之進が下部よな。汝が主の足にかけて、常に弄ぶこの鞠を、わが頂に蹴つけしうへハ、弓矢八幡堀忍ならず。殊更みづからきまきあらく詈れハ、長吉頭を^{〔13〕}地にほりこみ、仰悉く御尤にハ候へども、主人ハ嘗來ても賠る事か、吹バ飛なん下郎をもつて、鞠を得させよといひ來すこそ安からね、といきまきあらく詈れハ、長吉頭を^{〔13〕}地にほりこみ、仰悉く御尤にハ候へども、主人ハ嘗この事をしらず。下郎めがわざくれに、主の鞠を盜出し、過てお庭へ蹴込、剝お歴々のお頭へ、落かゝりしとハ運の盡、縱お手討になればとて、恨とハ思はねど、虫同前の下郎があやまち、只いく重にも御恕あつて、故なく鞠を給はらバ、世々生々の御高恩、と身を謙る主思ひ、とハ聞わけず太郎左衛門、只顧に声を振立、やをれ下郎、侍の頭へ鞠を蹴着、賠たりとも恕すべきや。これハ富之進がいひつけて、われに恥辱をとらせ、潛に興を催すとおぼし。覚期せよといひも証らず、刀すらりと抜はなせバ、長吉遙に飛すさり、罪あつて首を剉ら^{〔14〕}【挿絵】長吉剪鞠をうけとらん為太郎左衛門に打擲せられながらいよく^{〔14〕}賠る」

回答もせず、太郎左衛門あざ笑ひ、口かしこくもほざいたり。今この鞄だに返すならバ、思ふまゝにならふとな。それ／＼権平、其奴が面を左リ右リへ踏にじれ。承ると権平が、主におとらぬ傍若無人泥膣蹴出して蹴飛せバ、まだ手ぬるしとて太郎左衛門、庭下駄穿つ、丁と蹴る、額三寸やぶれ口、流るハ血と無念の涙、じつと堪る健氣の壯者、「¹⁵太郎左衛門呆れ果、思ひの外しぶとい奴。それ／＼鞄を受とれと、いひつゝ刀をとりなほし、寸々に切裂バ、これハと驚く長吉か、片頬へはつしと投つくる、その鞄摺で投かへし、一寸の虫にも五分の魂。手ごめになつたもこの鞄を、故なく貰受たいばかり。切裂れてハ鞄よりも、この場を丸くハかへられず、と胸をすえたる一言に、太郎左衛門ます／＼怒り、助て帰すをこのうへの、幸とは思ひしらず、飛て火に入る夏の虫、汝が命もねぐさつた。たゞんでしまへと目で下知されハ、點頭ながら権平が、脇指引ぬき切付るを、長吉閃りとかい潜り、直に後へかつぎ」投、井はまる泉水の、泥に塗れて濡鼠、猫にあふたる」とくにて、蠢く権平かひなしとて、太郎左衛門ハ無二無三に、切てかゝれバ長吉も、ぜひなく刀を抜あはせ、丁々はつしと切結ぶ、手煉の刀尖めざましき、運の究か太郎左衛門、飛石に跌て、よろめく処を長吉が、得たりと踏こむおがみ打、刀ハ名におふ長船近忠、切味すつぱとから竹割、二ツになつて倒るゝとき、やう／＼岸に跂つく権平、汝も冥土の供せよと、頭髪摺で胸さかを、つらぬく刀に池水も、血しほに染なす韓紅、楓を流すに彷彿たり。この物音をもれ聞てや、太郎左衛門か婦人の水草、何心なく」¹⁶走り來つ、この光景に驚き慌、こや喃々吉逃さじとて、弓手馬手よりとり巻を、或は切伏せ踏たふし、透間をうかゞひ長吉ハ庭の築垣跳越、ゆくへもしらず逃うせけり

第二編 ハ佐野次郎左衛門が紀行

この日佐野次郎左衛門ハ、出仕して家にあらざれハ、嘗てこの事をしらざりしに、若黨中間がしかゞゝの事ありとて、追／＼に告來れば、且驚き且怒り、とるものもとりあへず走り帰りしかど、【挿絵】長吉ハ已ことを得ず太郎左衛門、主従を切伏せ壇を跳越て脱れ去る」¹⁷はや長吉ハ、いづ地ゆきけん、しるもの更になかりける。この折しも挾隈富之進ハ、城中より退き帰る途中にて、件の風声を聞しかば、忙しく屋敷に立かへりて、才富次郎にまつ

このよしとへとみ
縁故を問バ富次郎もつゝむに言葉なく、鞠を太郎左衛門が庭へ踏落したる始終を物がたり
定て長吉ハ、逃がたき手話となりて、己ことを得ず、太郎左衛門主従を討て立退つらんとい
へバ、富之進いよ／＼驚き、早速人を東西に出して長吉を追出させ、ふたゝび出仕して縁由
を訴え奉るに、挾野次郎左衛門も、兄太郎左衛門が事を訴出ぬ。義弘審に両家の訴
を聞えて太郎左衛門事武藝¹⁸の師範たる身をもつて、名もなき下郎に撃れしこそ言語同断
の越度なれ。これによりて、才次郎左衛門ハ門戸を鎖し、長く慎居りて、重ての仰をまつ
さる程に長吉ハ、己ことを得ず太郎左衛門主従を討出で、五七里あまり落たりしが、忽
に思ふやう、われ今人を殺して立追バ、その崇恩ある主人に係りなん。いでや引かへして
名の告て出、潔く死せんにハと思ひ定め、本の路へ立かへらんとしつゝ、又思ふやう、われ
立かへりてその本末を吟味せらるゝときハ、富次郎様の難義ともなるまじきにあらず。
とかく主家の風声をよく聞いて、後に存亡を定ばやとて、二二日ハそのほとりの山里に立し
のびて、外ながらかの容子を聞ハ、主人ハ何の咎もなしといふに心おちつき、遂に故郷な
りける武州浅草に赴きて、叔母夫茂兵衛が家に到れバ裡にハ新しき位牌二面を居て、香花を
そなへさとびと里人あまた會合つゝ、念佛してありけるが、人々な長吉が帰り來たるを見て大に、歎
びまづこなたへとて誘ふ間に、妹八ツ橋も立てて、たえて久しき對面をうれしめど、愁の
いろ面にあらはれて覚つかなけれバ、長吉もこゝろに猜しながら、まづその故を¹⁹問ハ、
里人等言葉を齊していふやう、こゝの茂兵衛夫婦ハ、日來病事もなき人なるに、この月の
はじめより、時疫を病て打臥せしが、あはれなるかや猶船を弘誓の船に乗かえて、夫婦月
も日もかはらず、朝の露と消うせたり。しかるに御身ハ奉公持にて、いづ地へかゆきて
より、この二三年ハ音づれもなく、跡に残るハとしわかな妹子ひとり、見るにさへ痛まし
くて、村中相語て送葬も賑やかにとり行ひ、けふハ初七日の逮夜なれば、かやうに打よりて
ゑかう回向しまいらする也。やよ八ツ橋女郎、鬼のやうなる兄御のかへられたれば、よき後楯が
でき出来てめでたし。【挿絵】長吉故郷浅草へ立かへり妹八橋にあふて叔母夫茂兵衛妻夫が出
をさりしよしを聞ておどろく²⁰今よりハ大船に乗れるがごとく、心の碇うちおろし給へな
ど、いとかしましくいひあへるも、浦人のつねぞかし。長吉ハこれを聞いて、年來恵ふかゝ
りし、叔母御夫婦が臨終に、あはざる事を悔歎き、又里人が厚き情をよろこび聞えて、妹

八ツ橋に力を費せ、仏事追善ねんごろに営みける。かくて忌ども果しかば、村長をはじめ、里人等打ござりて、長吉を茂兵衛と改名し、叔母御の家を立給へとすゝむるに固辞がたく、一旦その意にまかせて、名迹相續するといへども、かねてこゝろに思ふやう、われ亡父の遺言を守り、武士となりて田津の家を引起さんと誓しが、己ことを得ず人を殺して、忽²¹日蔭の身となれバ、とても仕官の願ひかなはず。又太郎左衛門殿にハ、次郎左衛門殿といふ才御もあるなれば、かならずわれを冤ふべし。しかればわが命ハ、けふあつて翌なき身なるを、何条わづらはしき浦人の業をして世を貪るべき。とかく妹に婿をとりて相續させんにハ。されど故なくしてこの事をいひ出すとも、里人等が承引すまじければ、まつ身の行を抜²²にして世の人に疎るゝやうに謀らんとて、漁獵の事ハ外にしつ、里の壯者をあつめて力技を事とし、或は喧嘩の腰押、密通の出入り、弱きを助け強きを拉ぎ、邪なるを征し正しきに方人せしかば、その下風に²³たつ壯者も居多出來ける程に、敵をもつ身ハ、世をしのぶといふこゝろにて、みづから隠家の茂兵衛とぞ稱しける。その頃浅草川の南に、梅堀の小五郎兵衛といふ溢者ありけり。手下の悪輩數十人を養ひ、近在の宮地、都鄙の色里を横行し、動すれば喧嘩をしかけて、人の懷中物を奪ひとり、半ハ俠にして半ハ賊をなすといへども、その里に久しく住バ、おほくハ彼が手下に属て、茂兵衛を侮るもの少からざりしに、茂兵衛が住ひする浅草川より、姥が池につづきて、一條の小川あり、この処西ハ淺草寺の境内、東ハ無戸村²⁴今砂利也。この川にハ主ありといひ²²傳へて、年に一二度ハ、かならず水死するものありとぞ。さて一日風いたく吹られて、漁船も出しがたけれバ、茂兵衛ハ雜魚なりとも釣はやとて、釣竿を携²⁵、この川端をそここゝと立てぐるに、夏艸の藪より、小蛇一匹跋出て、茂兵衛が足首へ尾をくる／＼と巻しかば此愚者何するぞと思ひつゝ、拂も除ず打まもり居れ巴、この蛇のちから、形にも似ず、しゃちなどにて縊るごとくおぼえて、やうやく川へ引入れんとす。こハ癖ものごさんなれとて、兩足楚と踏²⁶こたへ、引入られじと構し程に、穿たる木履もろともに、片足ハ五六寸、土の中へめりこみて、さながら】【挿絵】長吉ハかくれ家の茂兵衛と改名してのち一日枝川のほとりにて蟬に足をまつはれ大に勇力を切れ、川水ざは／＼と逆巻と見えけるが、水ハ忽血に変じ、今まで小蛇と思ひしも、升尋あまりの大蛇にて、首のかたハ川むかひなる、松に必死と巻着つゝ、二ツに切れて蟲き居た

れバ、流逝の茂兵衛も仰天し、しばし呆れてありける処へ、里人四五人來かゝりて、この光景にうち驚き、やがて茂兵衛に力を認せ、やうやく彼蟠蛇を打ころしぬ。

さてこの事一郷の美談となりて、ある日そのちからを試んとて、太き縄を茂兵衛が足首へ結び着、究竟の壯者十人ばかりして、その縄をひく²⁴に、いまだ引やう弱しといふ。次才に人を増し加て、およそ三十人あまり、ちからを營て引しかば、その時茂兵衛莞尔と笑ひて、彼蟠蛇か引たりしハ、斯の如覺たりといふにみな／＼ます／＼感伏し²⁵はじめ侮りし壯者も、兄と稱、親とたのみで、その手にぞ属しける。

是ハさておき安房國にハ、里見義弘の御舎才、冠者次郎義廉、ある夜近従の侍挾隈富次郎只一人を召俱して、館をしのび出給ふ。その故いかにと尋るに、義廉の妾に佐江の方といへる女房あり。その容儀世にたぐひなかりし程に、こよなく寵愛し給ひて。比翼連理の契淺からざりしに、はからずも持病の痞²⁶とりつめて。名花一朝の嵐に散りぬ。かゝる歎きの折しもあれ、豫て婚縁の沙汰ありける、小弓の御所、義明の息女、近日輿入と聞えしかバ義廉ます／＼物うき事に思ひなし、終に遁世の志ふかく潛に館を脱出て、浦人に便船にして、武州品革の濱に着給ふ²⁷船中里見の重宝小楓形の剣をバ、みづから海底へ沈め給へり是すなはち今より佛門に入りて²⁸、ふたゝび故郷へかへらじと誓給ふによつて也。かくて義廉主従ハ、聊の由縁に就て、芝崎村の道場に走り入り、剃髪の事をたのみ聞え給へハ住持の聖人かひ／＼しく舍匿まゐらせ、祝髪の事ハいまだ遅ぎにあらず²⁹とて、学寮のかたはらに別室を修理、義廉主従を居まゐらせけり。

さる程に里見義弘ハ、義廉遂電の事を聞いて大に驚き給ひ、小弓の義明ハ、京都將軍の庶流足利政氏の二男にして、年來の方人なるに、わが才婚姻を嫌て、出奔せしと風聞あらバ、晋秦の親忽に破れて、縉大吏に及ぶべし。いかにも穩便のはからひを以て、冠者次郎を召かへすへしとて、やがて挾隈富之進を潛に招き給ひ、汝か才富次郎事、義廉が供して館を立退たれハ、汝も内々その行方ハしりつらん³⁰いそぎ義廉を追出して召つれ参るべしもし等閑の沙汰におよはゞ汝とても罪科脱べからず。【挿絵】冠者次郎義廉ハ佐江の方をうしなひて愁歎のあまり挾隈富次郎只一人をめし俱して³¹ひそかに武藏へ立こえ給ふ船中小楓形の宝劍を海へ沈め³²ながく仏門に入らんと誓ひ給ひける³³と厳しく命じ給ひしかば、富之進おそれ入て仰を承、あへて心當逆ハなけれども、次の日鎌倉を望て旅だち

ぬ義弘ハ事の序をもつて、佐野、次郎左衛門に仰下されけるハ、汝が兄太郎左衛門、下郎の手にかかりて相果し越度によつて、汝にハ久しく蟄居申つけおくところ、今般思ふ旨あるをもつて、追放せしむる也。もし一つの功を立るならバ、召かへさるゝ事もあるべしと命じ給へバ、次郎左衛門有がたしと御請申て、その日俄頃に屋敷を引はらひ、妹水草を伴ひて、武藏のかたへ赴きしが、道すがら思ふやう、主君の嚴命に、一つの功を立よとあるハ、敵を索る序をもつて、義廉君の行方を知らバ、伴ひ」²⁷ まゐらせよとある御心なるべし。しかれバ立地に仇をむくひ、冠者どに索ねあひまゐらせて、殊なる忠節をあらはし、兄が死後の耻を雪んものをと思ひ定め、ゆく下總なる國府の臺まで來たりし日、六十六部の行者に行あひしが、この六部、次郎左衛門を、と見かう見て、こハわが殿次郎左衛門様、従者をもつれ給はす、御兄才只一人にて、いつ國へ赴き給ふといふに、次郎左衛門も熟視れば、彼六部ハ、舊めし使ひし若黨佐一兵衛といふものなれば、互にうち驚きて、まづ彼がうへを間に、佐一兵衛荅て、それがし年來の奉公首尾よく勤課の故郷鎌倉へ引籠しハはや世の中を味氣なく思ひなし、日本國中の冥場を巡拝して、なき人の後世を吊ひ、五年にしてやうやく念願成就したれバ一トたび鎌倉へ立かへるべうおもひ、東國に杖を曳折しも、こゝにあひまゐらせしハ、竭せぬ主従の縁なるべし。君ハ又いかなる故ありて、かく奇げなる旅をバし給ひると間に、次郎左衛門ハ兄が横死の事、わがうへまでもおちもなく、事細やかに物がたれバ、佐一兵衛ハますく驚き、しからハ足弱を伴ひて、敵を索給はんハ便なきわざ也²⁸ まづそれがしと共に鎌倉へ立越給へ(水草様をバわれら預りまゐらせて、「よきに勤り候べしといふに、次郎左衛門も彼が志の信あるをよろこび、しからば妹が事をハ汝にたのむべし。鎌倉ハ東國第一繁昌の地なれば、敵長吉も、彼処などにあるまじきにあらされど、われハまづ常陸下野の兩國を索て跡よりぞ赴くべき。汝いよ／＼故郷処より水草を伴ひ葛飾のかたへ立帰れバ、次郎左衛門ハ只ひとり東北をさしてわかれる。されば佐一兵衛ハ水草を俱して名にしおふ、武藏下總の堺なる、墨田川まで來たりしに(この時日もやゝ向暮とすれば、この渡を過てこそ宿)【挿絵】挾野の次郎左衛門ハ兄の仇を報ん為妹水草を伴ひて下總のかたへ立こゆるみちにて旧のわかたう佐一兵衛〔に〕あづけ

〔その身ハ常陸のかたへおもむきけり^(一) しかるに梅堀の小五郎兵衛この容子を見て水草をう
ばい立のく²⁹」をも求べけれど、只顧路をいそぐ折しも、傍の藪陰より「さもいかめし
き大男忽然とあらはれ出、行ちがひさま足を揚て、佐一兵衛を撲と蹴たふし、水草を小脇
にかいこんで、跡をくらまし逃うせけり。佐一兵衛ハ膽をいたく蹴られ、しばし絶入であ
りけるが、やうやくに人ごゝちつきて身を起せバ、水草ハ既に奪とられて、夜もはや初更
のころなるにぞ、こハ何とせんと慌忙、只狂人のごとく走りめぐりつゝ、夜すがら彼此
を呻吟ども、水草がゆくへハしぬざりける。かの梅若を索たる、野上の班女がいにしへも、
かくやとおぼえてあはれなり。

敵討誰也行燈上巻畢

敵討誰也行燈下巻

第三編ハ芝崎の寺入り主従

馬琴戯編

墨田川原にて佐一兵衛を打たふし、水草を奪ひとりて立去し癖者ハ、梅堀の小五郎兵衛な
り。此小五郎兵衛、水草が容色の勝れたるを見て、俄頃に慾心發り、かく非道の行ひをなし
て、わが家に伴ひかへり、威しつ賺しつ、さまぐいひこしらへて、次の日元吉原とかいへ
る傾城町につれゆきて、おのが妹なりといつはり、年季七年の身價、六十兩をうけとり、
その金をバみな淫酒の爲につかひ果せしとぞ。妓院のあるじも、水草が殊さら艶やかな
るを見てふかく歎び、禿だちよりこゝに生育ものハ、おのづから見なれ聞なれて、手煉手管
に怜憐けれど、これハ十七才のきのふまで、かゝる世わたりせんとも思ひかけざる女子な
れば、糸竹の調、香花、茶の湯ハさらなり、廓の諸譯をものみこませ、そののち突出しとい
ふものにして、客にも會すべれとて、芝崎村の道場に隣て、所持の別荘あれバ、老女ひと
り、女の童ひとりを傳て、しばしこのところに養ひおく程に、光陰はゆく水よりも委なく、
はやくも三五月をぞ経たりける。

こゝに芝崎の道場にハ、冠者次郎義廉ぬし、挾隈富次郎とともに、しば¹ しうき世をし
のび給ふに、折しも七月七日の夜なれバ、端ちかうたち出て、牽牛織女の故事など語り出、
秋のはつ風まちがほに、萱が軒端に飛かふ童も、一星の天降るかと奇まれ、更ゆくまゝニい

も寐られず、只顧嘸ておはしけるに、忽地隣堺の生垣を切破て、こなたへしのび出るものあり。こハまつたく盜人ならん。追遺ひて驚さばやとて、主従手ごろの棒を携、木陰に窺ひ給ふともしらず、癖者は牆を潜りて、輒く脱れ出るところを、待設たる義廉主従、兩足拂ひて打仆せば、癖者撃と顛びつゝ、反起るを起さじと、富次郎飛かゝり、「【挿絵】よし廉芝崎に閑居のとき富次郎ともに賊を追ちらし給ふ」² 右の腕を楚と採る。ものくしやとふり拂ふ、袖ハ断れて手に残り、闇ハあやなし癖者ハ、跡をも見ずして逃てゆく、いづちまでもと追蒐るを、義廉しばしと呼とめ給ひ、やよ富次郎、逃るものをバ遠くな追ひそ。跡にもひとりの癖者あり。と宣ふ声をしてるべにて、富次郎撈りよれば、虚焼の薰えならずして、妙なる膚ハ正しく女子、こハこゝろえずともろともに、わが住部屋に引立かへり、さて火を照らしてよく見れば、年紀ハ十七八とおぼしき未通女の、雪はづかしき姿らうたけしを、物いふ事のならぬやうに、布にて口を括りしめたれバ、やがて衡³せたる手拭をとらせて、義廉つくづく見給ふに、その顔色聲音まで、往に世を去りし妾、佐江の方に露したがはざれば、こハなき魂のあこがれて、しばし見ゆるものなるか。わが爲に人あつて、わらはは元安房の國のものなるが、惣領の兄、太郎左衛門といふものを人に討れ、その仇を報ん為、次なる兄に伴れて、武藏のかたへ旅たちけるに、路にて舊の若黨佐一兵衛といふものにめぐりあひ、その人に俱せられて鎌倉へ赴んとて、墨田川原「と」とかいふ処まで來たる折しも、いとむくつけきあら男が、佐一兵衛を打たふし、わらはを奪去りておのれが妹なりといつはり、元吉原とやらんいふ色里に賣わたしぬ。さればこの身ハ思ひもかけず、河竹のながれに沈て、袖に涙の乾ねば、あるじまだ客にハ會せず、この御寺のあなたなる、別荘に養おきて、しばし物学びさせたりしに、彼あら男が名ハ小五郎兵衛とやらんいふ惡ものにて、折く彼處にしのび来つ、わりなく口説よるといへども、たえて返事もせざりしが、彼いかなる伎倆ありけん、今宵更てしのび來り、わらはに手拭を衝せ、肩に引かけて走り出しを、老女も女の童も、うまくねふりてこれを⁴ しらず憂がうへなる耻しめを、うけもやせんと淺ましくも、又悲しくも覺しに、はからず救ひ給はる事、うれしといふもあまりあり、と物がたりつゝ掌を合せ、あなたこなたを伏拝めば、富次郎聞とがめて、安房國の人にて、兄太郎左衛門といふものを、人に討せしとあるからハ、さてハ挾野、次郎左

あはのくに
安房國の人にて、兄太郎左衛門といふものを、人に討せしとあるからハ、さてハ挾野、次郎左

衛門の妹水草とのにハあらずやといへバ、女も大にうち驚き、こハ何としてわがうへを、くはしくもしり給ひし。いかにも水草なりといへバ、義廉も思ひかけずとて、今はた竭ぬ主従の、縁にしをあやしみ給ひけり。

時に富次郎がいふやう、挾野氏とわが家とハ、このとし来不和なる故に、軒をならべて住ながら、「御身にも面を會たる事もなけれど、太郎左衛門に水草といふ、季の妹ありし事はよくしりたり。かくいふ某ハ挾隈富之進が弟富次郎、これなるハ館の御舎弟、冠者次郎義廉君にて在する、と御身の上を物がたれバ、水草ハ遙に坐を去て、こハくいかに、とばかりに、歎びつ又悲みつ、夢に夢見るこゝちせり。富次郎ハ、次郎左衛門が、仇を冤ふと聞くにさへ、家隸ながら義理ある長吉、彼をやみく討せじ、と思へど更に色にも出さず。冠者次郎ハなき人に、似たる水草を憐みて、われもし昔の身なりせば、請出してこの女子に、苦界の勤ハさせまじきに、慄に世を厭てし、朽をしさ⁵ よと情ある、言葉に恋のあらはれて、思ひつめたる遁世も、うはのそらなる氣色なれば、これ幸と富次郎、わか殿にもこの日來徒然かちにましませバ、水草どのハこゝにありて、しばし慰めまゐらせ給へ。われらハ残る暑あたりか、俄頃に頭痛堪がたし、と此坐を外す頓作病、障子引たておくまりたる、一室に入りて休らひける。

秋とハいへど短夜の、次第／＼に更まさり、星の契りをかは竹も、まだ名のみして初恋の、睦言外にもらさじと、鴛鴦の衾を烏鵲の、はしなき夢をむすべる折しも、梅堀の小五郎兵衛ハ、住持同宿引つれて、手燭さしつけ部屋の戸を、「**挿繪** 梅堀の小五郎兵衛ハ義廉水草が密通見あらはし金にせんと較計」⁶ あらゝかに引あくれバ、裡にハ驚く義廉水草、逃出んにも窟の中、帶ざへとけて両目も、捺落の底へ入りたき風情。小五郎兵衛ハ用捨なく、窟の釣手を切おとし、一人の襟髪かい摑て、膝下へくつと引居る。この物音に富次郎も、一室を走り出れども、はや密夫と露顕せし、この為体に救ふべき、方便なけれバ拳を握り、歯を切りてひかへたり。小五郎兵衛ハいきまきあらく、只今もいふ通り、これなるハわが妹、の真男が相語て、人もなげなる轉び合。外から洩⁷ てハ親方へ、義理も缺れバ男もたゞと、宵からつけて押た出入。畢竟寺ハ揚屋同前、そら念佛する坊主もなれ合、これにてもなほ寺法や立、と詈りくるふ伎倆の土圭、曲るこゝろの撞木より、かねにする氣と見てとる

住持、さわぎたる氣色もなく、この仁ハ故あつて、當寺に寓居致ざるれど、出家ならねバ仏の教を、守るべきやうもなし。されど淫奔を事として、靈場を汚せしうへハ、早々寺を追放すべし。又女子ハ御身が妹といへど、既に廓へ賣たれバ、これ又其許のまゝにもならじ。殊さらこの女子を抱たる妓院の主何某ハ、當寺の檀那にてあるなれば、女子ハこゝより送るべし。しかれば御」身が義理の缺る事もなく、男のする事もなし、といはせもあへず小五郎兵衛、からくと打笑ひ、口かしこもいはるれど、石佛をたふしたやうに、寐こんだおの／＼をよび起し、たまく押た盜人を、このまゝにおくべきか。ぜひこの男ハ貰ひ受、心のまゝに計はんと、爰にかゝるを住持かさねて、人のさがハ見ゆれども、わが身の善惡ハ見えぬやら。達て此仁を心のまゝにせんとあらバ、其許をも又かへしがたし。凡夜ふけて人を訪にハ、門外よりおとなひて、門守を呼び起し、案内させて入るべきに、さへなくして牆を潜り、堀を越て來たりしからハ、とりもなほさず盜人同前。まづこの事より糺明せんや。といはれて流石の小五郎兵衛も、「それハとばかり口ごもれバ、富次郎すゝみ出、最前しおび来れるに癖者、とり逃せども手に残る、その片袖とさし出すを、住持それをバ見もやらず、物とられねバ盜人を、放て遣も出家の役。小五郎兵衛たにいひぶんなくハ、事明白に糺すに及ばず。いざ／＼梅堀退参あれ、と寄ずさはらぬ挨拶に、伎倆のうらをかくばかり、理の當然に横紙も、破りかねたる立しほあしく、しからバ渠奴等ハ此寺を、忽地に追ひ出し給へ。もし一チ日も苗おかバ、吃度出入を致すべし。その時後悔し給ふな、とほざきにほざいて小五郎兵衛ハ、小門の潜ひらかせて、やがて家路にかへりける。

住持の上人は義廉主従にうち對ひ、わか氣とハはいひな」がら、遁世の望に引かへ、驚御越あれ。又女子が事ハ、親方を呼びよせて、引わたし遣すべし。と委細に命じ給ふにぞ、役僧承り、天明のころ人を走せて、彼親方を招きよせ、水草を遞与したりければ、冠者次郎主従も、身の悞に耻入て、しほ／＼寺をたち出給ひ、いづくに當ハなけれども、心筑紫の神垣を、いく世うつして上久し、湯嶋のかたへ赴きて、繫き小松原を遞給ふに、待設たる小五郎兵衛、手下の悪もの十人あまり、大路せましと立ふさがり、形狀にも似ぬ押着もの、以後の」見懲し棒くらへ、と打てかゝれバ富次郎、主を後に立向ひ、抜あはせて多勢に無勢、閃く棒ハ肩腰の、わかつもなく打居られ、主従息もたえぐに、そのまゝ撲地と倒

れけり。

小五郎兵衛声をかけ、是奴殺すも罪つくり、みなひけくと頗で下知あごへげちとみ、富次郎が懷ふところに、手をさし入て断られし、わが片袖かたそでをとり復かへして、立かへらんとする折おりしも、思ひもかけず松蔭まつかげより、小五郎兵衛且待まうまでと、呼とよめて立出るハ、隠家の茂兵衛なり。これハと驚く小五郎兵衛、手下の徒てしも氣味きみわるく、一一ツとことこへよりこぞれば、富次郎起おきかへり、こハめづらしや長吉ちやうきら。われくなんぎが難義すぢの筋すじを、しつて」【挿絵】茂兵衛しかへして冠者くわんじやしゅ主從しゆしゆをすくひまゐらす」¹⁰こゝへ來きりしか。思ひかけずと歛よろこべバ、茂兵衛もハ土づちに兩手りやうてを着つき、多年の御恩ごおんを仇あたにして、故郷浅草ふなこへ逃にげかへり、しばしうき世よをしのぶ身みの、名も隠家の茂兵衛と更め、わがまゝに日は送れども、主君しゅくんの惠めぐみハ片時へんしも忘れず。しかるに此程このほどわか殿とのにハ、やんごとなき御方おんかたの御供ともあつ有て、芝崎しばさきの道場どうじょうに御坐ござある事を、子かたのものが聞出し、今朝未明に走り来て、小五郎兵衛もわしみが較計くわくひまで、委細告くわくひるに心こころもとなく、路みちをいそぎて参まりしに、今一足遅ひとあとおぞくして、彼等かれらが打擲ちうりにあはせまゐらせしこ悔くわいしけれ。されど茂兵衛まゐが参れるからは、何更なにごとも打うちまかせ、それにて見物けんぶつし給さへしといひ慰なぐさめ」¹¹小五郎兵衛が、ほとり近ちかくあゆみより、单衣ひとへの袖そでを肩までかき揚あけ、長き脇指わきわざの刀とがを、鎗とが短たんにして、身みをひたと立ならび、彼處かしこなる一方ひとかたハ、茂兵衛もが恩おんある人ひとなるに、何科なにとがあつて打擲ちうりせし。その訣聞けふんと問とひ泥どろを塗ぬる大盜人おほぬすびと、以後いごの戒情いましめなきの笞しもと、痛めハしうちぞ、とそら嘯うそぶけバ茂兵衛も聞きて、否い盜人むねすびとの宛あてな名ながちがふ。汝なんぢ日外旅いつざやたびの女子をなごを拐掣くわいせきし、妹いもどと偽り廊くるはへ賣うりて、許多うそぶけの身價みのしろを貪むさばれども、なほ飽あかずして色いろに假托ことよせ、再び女子ふたごを盜ぬすみ出して、遠とほき縣あがたへ八重賣やへうりの、較計くわくひちがふた意趣いしゅかへし。證據しそうこハこれぞといひもあへず、小五郎兵衛ふたごが懷ふところより、引ひ出したる以前いぜんの片袖かたそで、それハとせて匱あはてさし出す、腕首うでひところ捉なげて投いだつくれ、手下の悪棍あくわん騒さわぎたち、打うちてかゝる六尺棒ぼうを、一一ツによせて引ひ手ぎくり、中なかるをさいはひ打うちすゆれ、算木みだを乱すに異ことならず。茂兵衛まゐハかく打伏うちふせて匱あはりけるハ、廓こひの恋うりものかひもの、彼女子わらのさはが客達きゃくたら、新枕ひまくらするその夜よにハ、この方かたさまのお供ともして、茂兵衛まゐが會まわせ進すすらする。妨さまたじんものハ誰だれにもあれ、息いきの根ね出だるを合がく点てんなら、かならず出入いりをもつて来こよ、と飽あくまでに廣言くわうげんし、白眼しらまな着きれバ小五郎兵衛まゐ、許多うそぶけの手下諸しゆぞくともに、點頭うなづくばかり腰こし立たず。こゝちよかりし光景ありさま也。

ハ義廉主従を伴ひかへり、兩三日ハわが家におきまるらせしが、こゝハ人出入繁くして、
世をしのび給ふに便あしければとて、近き辺の借屋に移し入れ奉り、おのれハ日ごとに行
かよひて、よろづ乏しからず賄ひまゐらせしかば、冠者次郎はさら也、富次郎も只管彼が
信ある志を感悦し、主従更にちからを得て、十日あまりを過せしに水草ハ誰也と改名し、
近日客を迎ふるといふ風聞有バ、茂兵衛その日より郷導して、誰也を義廉にあはせ進らせ
しに、小五郎兵衛か徒も、向の爲返しに手懲して、これを阻んとすることかなはず、却世
ものわらひの胡盧にぞなれりける。

第四編ハ義女八橋が事蹟

冠者次郎義廉ハ、隠家の茂兵衛が郷導にて、突出しのその日より、誰也に會馴給ひしかば、
誰也も義廉ハ古主なるに姿も殊さら雛び給へバ、この殿ならで他し客に、身をまかせじと
契る程に、金に穹るハ廓通の生平なり。茂兵衛ハ所持の獵船を沽却し、或ハ利足過分の金を
かりうけ借受などして、遊興の雜費を調まゐらせしに、近曾誰也がかたへ、黄金あまたもてる田舎客
のありて、只一度坐敷を勤しに、身受せんとて、その事既に整ふよし聞えければ、義廉ハい
ふも更也、茂兵衛も¹³ 彼女子を、他し人に通与てハ、富次郎へ義理たゞ、且小五郎兵衛
が徒に、笑れんも朽をしとて、只管に焦燥ども、指あたりて身價の、とゝのふべきよすが
もなけれど、妹八橋を廓へ賣らばやと思ひしが、又思ひ回らせバ、縊手結の金なりとも、
只一人の妹を賣て、他人の遊興を助るなど、縁由しらぬ世の人ハ、爪弾して憚るべし。と
かく布金ある壻をえらみて、その金を誰也が手附にわたし、しばし身受の事を阻バ、その
うちにハ、別に金の調ふべき手段もありなんと思案し、所持の獵船五艘の外に、如些々の
田地ありなど、よきに誑りこしらへて、八橋を妻すべき、」壻をがなと索るに、無戸村の南
なる、舟川戸^{花川戸} 今いふの三五右衛門といふもの媒して、男態こそ二の町なれ、百兩の布金に
て、壻入すべしと望ものあるよしを告來たれば、茂兵衛大によろこびて八橋にもいひ聞せ、
速に熟談して、既に婚礼の夜にもなりにければ、三五右衛門ハ短袴を、跨るやうに穿な
して、彼壻を伴ひ来り、是ハ癩の鰐藏とて、元ハ鎌倉にて、いと富りし商人の一男也。見給
ふじとく容貌ハ葛城の神に似たれど、心さまハ活る佛にて候なる。常言に馬にハ乗て見よ、
人にハ添てしれといふこともあれバ、只玉椿の八千代かけて、夫婦睦しく相語給へなど、

信だちて引合するにぞ、茂兵衛¹⁴ 同胞燈燭をさし向て、その人をよく見るに、癩といへるもことわりや、髪の毛ハ耳の脇と、項のあたりに斑に残り、鼻の穴はつかに明て、眼汁夥しく流れ出、眉毛ハ一條もなくて、膚ハすべて猿滑といふ樹のごとく、又霸王樹に社杯着せたるに異ならねば、八橋ハ呆に呆れて、一目とも見もやらず、かゝるべしともしらざりし。

茂兵衛も妹が便なさと、世の聞えさへうしろめだく、しばし回答もせざりしが、たまく調ふ今宵の布金、疥癬にもせよ餓鬼にもあれ、一旦結びし婚縁を、破んハ男子にあらず、と志を励しつゝ、みつから立て盃を、とり出す折しもあれ、外面よりはら／＼と、うちし礫ハ男の髪、ひとつ／＼】**挿絵**八橋鰐藏婚姻の夜何ものともしらずあまたの髪をなげこむ¹⁵」に札着て、七人が名を記したれば、茂兵衛大に怒り罵り、われよく是を猜したり。今宵の婚姻を妨して、過つる遺恨を復さん爲、小五郎兵衛が徒の奸計に究れり、いで引抜て被せられたる、ぬれ衣を乾させん、といひかけて立あがるを、三五右衛門引とゞめ、兄貴こそさへおぼせ、わかき女子の事なれば、外に契りし男ありて、恨の髪切はらひ、赤き心を示せしもの歟。しかれバわれら婿どのを預り歸り、いよ／＼妹御に他心なきに於てハ、又別に日をえらみ、盃さするも遅からじ、といはせもあへず声ふり立、かくまで結びし婚縁を翌¹⁶へも延す茂兵衛ならず。よしや八橋に密男あらば、首を並べる天下の掟、婿の心¹⁶にまかするに、何憚のあるべきや、と言潔くいひはなせバ、鰐藏聞いてうち點頭、舅の仰いたのもし。人づてならで八橋が、密男ハわれ正すべし。誘給へとて泣沈む、妻の手をとる夫より、婿の腰押す媒も、襖引あけ奥まりたる、背戸屋のかたへ赴きける。

鐘の音も物おもへとや夕ぐれて、路くられれど富次郎ハ、頓の事とて挑灯も、ともさでひとり廊より、小もどりして裡に入り、茂兵衛に對ていへりけるハ、誰也が身受も翌の夜に、はや事迫ると聞ゆれば、義廉ふかく憂ひ給ひ、もしわが方に根引ならずハ、共に死んと悶つゝ、今宵も又帰り来ます。いかに諫れども聴入なければ、この事汝に告んため、潜まだ果ざるに、手づから持る小挑灯、野袴着たる侍が、外面よりさし覗き、茂兵衛にあはんとおとなふハ、これまがふべうもなき、挾隈富之進にてありければ、富次郎大に慌かくるゝ隙も納戸の押入、戸棚へ跋入る後影を、それと見れども富之進ハ、しらずがほして裡

誉らるゝハわれならで、みな八橋が兄をおもふ、信義と其許の精忠に、猛きこゝろも身を
耻し、かひなきわが名を告るべしとて、富之進に目礼し、言をあらためていへりけるハ、
20 われ實ハ汝に討れたる、太郎左衛門が才なる、挾野次郎左衛門常正也。過つる年兄を討
れしその日より、復讐に思ひを焦すといへども、蟄居の仰を蒙りしかバ、徒に月日を過し、
そのゝち身を放にする事を許されてより、関の八州を徧歴して汝を索しに、ある時下総の
銚子口より便船して、相模のかたへ赴んとせしに、その船に類つきて、既に覆なんく
とす。こハ鰐の所爲也とて、舟人等戦慄にぞ、われその時思ふやう、とても本望を遂ずし
て、むなしく溺れ死んより、その鰐を刺とめて、運を天にまかせんものをと、みづから舷
に跳出れハ、高浪左右にさとわかれて、千石を積船よりも、なほ大きやかなる」【挿絵】次
郎左衛門八橋が義心を感じて茂兵衛を見逃す」²¹ 悪魚、忽然と浮み出、口を開きて逆来た
るを、こゝろに神佛を祈念し、短き刀を握りもち、鰐の頸に飛入りつゝのあたりをかぎ
破り、その痕口より脱れ出、辛じて悪魚ハ爲とめしが、吾も立地に絶入て、更に生べうもあ
らざるを、舟人等が介抱にて、数月のゝちやうやく本復すといへども、一旦鰐の咽喉に入り
しかば、肉爛れ毛髪脱、さながら懶人のごとくなりぬ。むかし唐山晋の豫讓ハ、灰を吞
身に漆し、姿を簗して仇を窺ふ、われハ求ずして斯ばかり、形状昔に異なれば、仇を索る
に究竟なりと歎びつゝ、遂に鎌倉に赴き、舊の若黨、佐一兵衛を訪て、妹水草²¹ が安否を
問バ、彼ハ其の日、墨田川原にて、野人に奪ひとられしと、聞事毎に憂をかさね、佐一兵衛
とともに武藏に来りて、水草がゆくへを索しに、元吉原にて誰也と呼る遊女は、その人
なりと灰に聞。行て見ばやと思ふ折しも汝が在処したるうへ、壻をえらむと風聞あれバ、
佐一兵衛を媒とし、輒くこれを謀謀せて、討罪さんと思ふ間もなく、降て涌たる脅の騒動、
計にもせよ、妹背の縁を結つる八橋に、わがうへを明さずハ、色に迷ひて彼女子を、陥
るゝに似たりと思ひ、告るに實をもつてせしかば、八橋ふかく悲みて、何とぞわらはが首
を剣、こよひの仇討²² を延てたべ、と舍兄を思ふ眞實の切なる托默止がたく、打たる首ハ
けふ一日、われから恕身がはりぞや。人の賢愚齊しからずとハいへど、讐人ながらその
行ひ、兄ハ忠あり妹ハ義あり。それに引かへ吾侪ハ、人倫の道に疎く、兄ハうき世の人に憎
れ、妹ハ又河竹の流に沈むのみならず、獸に似たる過あり。忠ある茂兵衛を討とつて、兄
が冤ハ雪とも、妹が惡名ハ雪がたし。こゝをもて八橋が志を空うせず、その首打て小五郎

兵衛が、手下の奴原切創す、壇と舅の因縁故、斯のごとしと物語れば、富之進もうち驚き、
實も今惡ものどもを討出しへのうち、只人ならずと思ひしに、拵ハ²² 挟野次郎左にてあ
りつるかな。聲音ハ昔にかはらねど、その人とも思はれず、といひも果ざるその處へ、媒
の佐一兵衛一室より立出て、近曾船川戸に住ひして、敵へ手引の媒ハ、挾野の若黨佐一兵
衛、わが爲にハ主の仇、茂兵衛いかにと詰よせたり。茂兵衛縁由を聞いて、驚くといへども
更に騒がすして、次郎左衛門がまへに坐をト、男を磨く隠家の茂兵衛が、妹八橋に助られ、
面押拭て存命べき歟。いざ立あがつて兄の仇、首打おとして手向給へ、といひつゝ頸ざし
伸せバ、いふにや及ぶと次郎左衛門、刀すらりと抜放して、茂兵衛が髻切はらひ、冠者ど
のをかくまひし、罪ある」茂兵衛を次郎左衛門が、私にハ討がたし。この事殿のお間に達
し、敵討ハ後日の沙汰。空衣を刺たる例にならひ、首に換る髻ハ法の郷導の吾妹子が、寐
くたれ髪の一睡ねぶれハ善惡もわかなくに、世にハあれどもなしの本、隠家の茂睡入道と
法号し、妹かなき跡吊れよ、といふに茂兵衛も感伏し、命を惜むにあらねども、しばしハ
こゝにすみだ川、ながらふる身を哀れとハ、ゆふこえて行人も見よ。待乳の山の草の戸に、
なほ再會を期すべしと、誓ハ堅き碑の、一首ハこれとしられたり。富之進も感激し、一旦
といひつゝ戸棚に手をかくるを、明させじと隠家が阻つ、攘つ、あらそふ程に、戸を引たふ
の義に仗て、次郎左ハ仇を見逃せども、見逃しがたきハ富次郎。取²⁴ 前在所ハ見おきし、
うせしか。但し心あつての事か。ゆくへハ正に元吉原。冠者次郎の御身の上も、おぼつか
なしとて富之進、おつとり刀に走出れバ、茂兵衛ハさらなり次郎左衛門、佐一兵衛も諸とも
に、裳を纏て追行ける。

第五編ハ誰也行燈の縁故

挟隈富次郎ハ、戸棚の中にかくれ居て、兄富之進が物語を、「一五一十聞とづけ、大に驚きて悔耻るといへども、今ハそのかひなかりし程に、せめて誰を刺殺して、義廉の汚名をすゝぎ、腹かき切らんと思ひ定め、潛に壁を切破りて、その夜元吉原に走りゆき、誰也を呼出していへりけるハ、御身か根引の事につきて、冠者さまにもしらせませず、茂兵衛が申べき事ありとて、只今彼處の揚屋にあり。誘給へ、よき左右あらんと誑るにぞ、誰也ハこれを實と

し、うれしきまゝに心忙しければ、禿のみを携て走り出、富次郎とともに賢藏寺町のかたへ赴くに、廟の子四もはや過て、いと闇き夜ハ常よりも、往²⁵ 来ハはやく迹絶たり。時分ハよしと富次郎、抜手も見せず後より、誰也を撲地と切伏せて、起しも立すとゞめの刀尖、魂消声ともろとも「に」わつと泣出す禿が周章。ひとり聞着ふたりが見つけ、すは人殺しといふ程こそあれ、手にく桿棒長楷²⁶子、搦捉らんと鬪バ、自害する間もあら物くし、と多勢を相手に切たてゝ、思ひ究し死もの狂ひ。こゝを最期と戦へバ、この勢ひに辟易し、みなむらゝと逃散たり。いでこの隙に腹切らん、と持たる刀をとりなほせば、手下の仇を復ん爲、茂兵衛が跡を慕ひつゝ、走り來たる小五郎兵衛、思ひもよらぬ後より、楚²⁷【挿絵】挾隈富次郎誰也を切害し比類なきはたらきして小五郎兵衛をころす²⁸と組むを振ほとき、腊ふかく丁と刺バ、撞と倒るゝ小五郎兵衛が、胸のあたりへ乗かゝり、刀逆手にわれとわが、腹へぐつと衝たつる。

浩²⁹処へ富之進等、四人齊く走り来つ。かくと見てこへいかに、と人々驚くその中にも、富之進声をかけ、やれオ、その刀、しばし引廻さずして兄が今、いふことをよく聞よかし、といふに茂兵衛がさし寄て、抱きとゞめて勧れバ、富之進言をあらため、向にわれ外ながら、冠者³⁰どのと誰也とハ、兄弟なりと物がたりしハ、元來跡なき空言にて、汝に誰也を殺させて寸忠を立さすべき、謀にてありけるなり。その故ハ義廉君、佐江の方の³¹色に溺れ、小弓家の婚姻を固辞給ふのみならず、彼愛妾が世を去たる愁歎のあまり、遁世の望ありとて、館を逐電し給ひながら、ふたゝび誰也が色に迷ひ、放蕩の聞えあるときハ、両家の和親終に破れて、君家の御一大事となりなんハ眼前なり。いかにもして思ひきらせ進らせ、故なく帰館あらせまほしく、誰也にハ先だつて、潛に存念をかたり聞せ、先君の御落胤なりと偽りて、死ねよ殺せと人ならぬ、心を鬼になしたりし、この身の劬勞ハ数ならず。誰也と汝が一命を捨てられ巴こそ浪風もたゝで治る兩家の大幸。外にハ誰也が非³²【挿絵】富次郎誰也を殺してわか殿の汚名をすゝぎ自害する²⁸ 命の死も、挾隈が戀の意趣切といひもて傳へバおのづから、主君の浮名も消ぬべし。とうち明したる胸の闇、真如の月にあへるがごとく、只手を合す富次郎が、今般の本望次郎左衛門も、はじめの恨引かへて、妹が取期もなかゝに、忠義のはしとなりつるか、ところに誓ていへばえに、いはぬ歎きを身ひとつに、思ひ迫りて冠者次郎、物蔭より立出給ひ、わが色慾の迷より、罪なき人を殺み

せし事、顧れ巴面目なし。さりながら、とても館へ帰りがたきハ、前頃故郷より、武藏へ
赴く船中にて、小楓形の宝劍を海底へ沈たれば、先祖へ不幸兄上に、いひわけなし²⁹と宣
へバ、次郎左衛門すゝみ出、その義ハ御こゝろ安かるべし。それがし日外爲とめたる鰐の
腹を、浦人等に裂せ見れハ、内に一振の劍ありて、まがふべうもあらぬ御家の重宝、小つき
がたの名劍なれば、もしや義廉君にハ入水ましませしかと咲みながら、身を離さず所持い
たせり。いざ／＼返し進らせん。といひつゝ腰なる刀を取て、冠者次郎に獻れば、義廉
はいふもさらなり。みな／＼不思議の忠節ぞ、と次郎左衛門を賞美して、本領安堵の吹粧
せり。かゝる上ハ冠者様の御供して、わか住家まで帰らせ給へ跡ハ茂兵衛が請取て、「廓
の出入りハよきやうに、執おさめんと申にそ、しかば汝にまかせんとて、帰路を促す富之
進。見おくる弟ハ死出の旅、冥土の闇を照らすなる、手向ハたそや行燈を、五ツの町におく
事ハ、この因縁としら鞆組。挾野次郎左に八橋も、廟にかかる物がたり、妻恋ふ雉子も浅草
に、その隠家ハかくれなき、色の里見と小弓御所、故なく婚禮整て、めでたく榮給ひしと
なん。

敵討誰也行燈下巻畢

それしじん
夫詩人にあらずんバ、詩を呈する事なけれとハ、むだ骨をらせぬ古人の金言。げにや知音
にあらざれば、伯牙が琴も二絃ほどハ、とつちりとんと聴ものなし。さればこの書の事た
るや、物しりくさいしやらくさい、威し文句はさらりと已て、子どもによまする八文字、ち
よつと撮だ揚衿は、いづくのたそや誰也が道中、長い話ハ九さつまでも、行べきものを二冊
にて、五日限りに請合し、川苗なしの上下物、たしか画工ハ一陽斎、歳々年々相似たる、花
の江戸作人の樹々、本屋の山とて桜木に、鏤られて巴面目も、なしの本とか聞えてし、事蹟
を筆に操の、狂言綺語に執なして、今茲もかはらぬ評判を、まつ乳の山の朝参り、百度参
りの催促ハ、いくめぐりして三圍の、土手を机に向嶋、離さぬ硯と墨田川、その名どころに
近く住む、個板本が需に應じて、跋さへ人の手を借りらず、かさねてこゝに題する而已。

剖廟

小泉新八郎

十返舎一九著

復讐
奇談 天橋立

一陽齋豊國画

全二冊

鏡池植女物語

かゞみがいきう
中曲亭主人戯作
本二冊來卯出版

名ハそれとしらずともしれと詠したる遊女うへ女がふかき言の葉をたづね人のまことの切
なるを述この書序文に述懐のことばを吐かず編中に悪しやれを云ず人を警するにたらずといへども見るものに害なし出版の日四方の高評ヲ希のみ

文化三丙寅年春正月發行

書肆 鶴屋金助 桢

〈附記〉

本稿を成すに当り、向井信夫氏には貴重な資料の使用を許されたばかりでなく、様々の
有益な御教示をいただいた。末稿ながら記して、厚く御礼申上げます。また、機械可読化
に際しては神田正行氏のお手を煩わせた。併せて感謝致します。